
異世界でカフェを開店しました。

林檎飴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界でカフェを開店しました。

【Nコード】

N8476X

【作者名】

林檎飴

【あらすじ】

フェリフォミア王国王都にひっそり佇むカフェ。そのオーナーは異世界出身の女性だった。「なんで？文化って普通は衣食住から発展するんじゃないの？なんでここのご飯はこんなにまずいのー！！」魔術が世界基準のその世界で、とりあえず、おいしいご飯が食べられる生活を目指します。

当店はサボり場所ではありません。

「聞いてよ、リサちゃん」

「はいはい、聞いてますよー」

ここはフェリフォミア王国王都の城下にひっそり佇むカフェ。平穏な昼下りの店内ではゆるやかな時間が流れていた。

「僕だつてさーこんなに働いてるのに。そもそも出世したのも休みが多くなるって言われたからなのになー」

カウンターの上に俯せ、愚痴っている男性はギルフォード・ハイド・クロード。私の恩人で養父だ。そして、この国の筆頭王宮魔術師という肩書を持つ稀有な人だったりする。

私の経営するカフェ「おむすび」に仕事場（王宮）を抜け出してはちよくちよくやってくる。サボりに。

店の前に馬車が止まったところを見ると、恐らく今日もそろそろお迎えが来たようだ。

リリンと、ドアについているベル音が鳴り、入口を見ると一人の男性が店内に入ってきた。その男性はカウンター席に座るギルフォードさんを見つけると、につこりと笑顔を浮かべた。

……ただし、目は全然笑っていないが。

「ごきげんよう、ギルフォード。こんな日に城下で会うなんて奇

遇ですねえ」

一歩一歩と近づいてくる男にギルフォードさんは、顔をひきつらせた。

「や、やあロイズ、君もリサのお菓子を食べに来たのかなー？
あ、それともご飯…？ アハハ、ハ…」

先ほどまでのリラックスした態度とは打って変わり、びくびくとしながら返答するギルフォードさん。目、泳ぎまくってますよ。

いつもならお弟子さんだったり、部下の人たちが、とっ捕ま……
迎えに来るのだが、今日やってきたのは、同僚で文官長を務めるロイズ・ウォーロックさんだった。時期宰相とも噂されている彼は、
変わり者のギルフォードさんの数少ない友人の一人でもあった。

「君の部下とお弟子さんは生憎、忙しすぎて迎えにも来れないよ
うなので私が来ましたよ」

逃げようと腰を浮かせたギルフォードさんの襟首を素早く掴むロ
イドさん。文官とは思えない素早い身のこなしと、慣れた手付きに
年季を感じるのは私だけでしょうか……。

「ではリサ嬢、皆様、お騒がせ致しました」

紳士らしく、私と、そして店内のお客様に謝罪をし、ロイドさん
は店を出て行った。……右手に涙目であうあう言っているギルフォ
ードさんを引き摺って。

いい歳したおっさんが涙目って、結構シニールだ……。とりあえ

ず、今日いるお客さんが常連さんだけで良かった。

ここはフェリフォミア王国王都の城下にひっそり佇むカフェ「おむすび」。異国情緒あふれる名前のそのお店は、珍しい美味しいお菓子と、食べたこともない料理を出す不思議なお店だ。

だってその店主は、別世界の日本という国から来た異世界人なのだから。

当店はサボり場所ではありません。（後書き）

初投稿です。

至らないところも多々ありますが、楽しんで読んで頂けたら幸いです。

【R - 15】 【残酷な描写あり】 は今のところ予定しておりませんが、念の為、表記しておきます。

じいじはどいでしょう？

さて、私、黒川^{クロカワ} 理沙^{リサ}がこの異世界へやってきたのは、時を今から約2年前にさかのぼる。

日本のごく平凡な田舎町の、ごく一般的な家庭に生まれた私は、ごく普通な短大を卒業し、ごく自然に就職した。可もなく不可もなく、大きな問題もなく、その会社で勤続2年を迎え、私は22歳になった翌日。

私は何の前触れもなしに異世界へトリップした。

……あー、なんか体が痛い。体中の鈍痛にじわじわと意識が目覚めてくる。ベットで寝ていた気がするのに、体を感じる質感は至極固い。そして、緑のにおいがする。私には部屋に観葉植物を置くんておしゃれな趣味はないのに。

重い瞼をゆっくりあげると、そこは森の中だった。

都会の喧騒もなく、時折風に揺れた木々の葉擦れの音が聞こえる。

「…じいじはどい？」

とか、お決まりのセリフを言ってみる。もちろん返ってくる声はない。

とりあえず状況確認。上体を起こし、身の周りを見回してみた。

服装は昨日眠った時の恰好である部屋着。持ち物はないが、助かったことはルームシューズを履いている為、かろうじて裸足ではないこと。

現在地は不明。人の気配はない。その他の動物の気配もない、……いや、あっても困るが。

さて、どうしようか。何も持っていない以上、生きるためには水と食料の確保をしなければ。ここはどこかとか、なんでこんなところににいるかとかは、今のところ置いておく。

人間、窮地に陥った時は意外と現実的なものだ。……私だけか？

まあ、とりあえずは人里を目指そう。

一人脳内会議を終わったところで立ち上がり、衣服に付いた土埃を簡単に払うと、私は歩き出した。なんとなく、太陽と逆向きの北っぽい方向を目指して。

と、そんな感じで歩き出した私が、人里近くの街道に辿り着いたのがその2日後。そこで意識を失った私が、運よく通りがかった夫婦に拾われ、目を覚ますのはそのまた1日後のことだった。

拾われたようです。

「ね、こっちはどう？ いや、こっちの方が良いかしら？」

「別な世界か？ やっぱり存在するんだね」

頻りに話しかける人物が二人。

一人は、アナスタシア・アシュリー・クロードさん。彼女は、私が現在いる天蓋付きのベッドの上で何着ものドレスを広げ、私の体に合わせては、とつかえひつかえしている。

もう一人は、ギルフォード・ハイド・クロードさん。彼は、ベッドサイドのテーブルの上で、世界地図と何冊かの本を広げ、羊皮紙に何かを書き込んでいた。

二人は、私を保護してくれた夫婦だった。

私は森の中を2日間彷徨い、街道で行き倒れていたところをこのクロード夫婦に拾われた。その1日後に目を覚ました私は、状況の確認とお礼、少しの警戒を抱きながらクロード夫婦に身の上を話しかことにした。

気付いたら森にいたこと、自分は日本の東京出身なこと、等々。少しテンパっていた為、話が支離滅裂なきがするが、二人がうんうんと頷いてくれているのを見ると、伝わっているようなので大丈夫

だと思う。

粗方、私が話終わると、ギルフォードさんは軽い口調で言った――
――リサちゃんは恐らく別世界から来たんだね、と。

……いや、なんとなく思っていた。だって、アナスタシアさんは髪色はピンクで、目が紫。ギルフォードさんは髪は茶色と珍しくはないが、目がシルバーグレーなんかもん。始めはなんてファンキーな人達なんだ……と思おうとしたが、服装は中世ヨーロッパ風だし、部屋の中には家電製品がひとつもない。そして、視界に入れないようにしていたが、羽のついたちっちゃい人が私の膝の上にとっとこ登って来たのが追い打ちをかけた。

ここは、異世界らしく、私は所謂、異世界トリップなるものをしてしまったらしい。二人の髪色も目の色も生まれつきで、この世界では珍しくはないらしい。むしろ髪の色と目の色が黒であり、その上、同色な私の方が珍しいらしい。そして、膝の上にいるちっちゃい人は思った通り、精霊らしい。ああ、ふぁんたじー……。

私の生まれ持った黒髪黒目を話したところでアナスタシアさんの目が輝き、膝の上にいるちっちゃい人を指摘したことでギルフォードさんの目が輝き、冒頭の状況になった。それぞれ自分の興味のある分野に思考が飛んだらしい。

二人の私に向かったの一方通行な会話は、数分後に部屋にやってきた侍女長のマリーさんによって一喝され、敢無く終了。当分のところ、心優しいクロード夫婦にお世話になるということで、マリーさんが話をまとめ、二人を部屋から追い出した。マリーさん強し。

やんわり私も休むように促され、それに従うことにした。

家族ができました。

この世界に来て4日目。

昨日、ぐだぐだで終わった説明を詳しく聞くべく、部屋のソファ―にギルフォードさんとアナスタシアさんと向かい合って座った。今日はお目付け役として、侍女長のマリーさんも部屋にいる為、脱線することはないだろう。

始めに話を切り出したのはギルフォードさんだった。

「実は僕、この国の王宮魔術師をしていてね、リサちゃんを見つけたのはあの辺りで起こった魔術現象を調査するためだったんだよ」

彼曰く、私がこの世界に来た日にあの森で不思議な発光が起こったらしい。王宮魔術師である彼は妻とのデートがてらその調査に行ったらしい。現場を調べてみるも痕跡らしいものはほとんどなく、諦めて帰路についたところ、行き倒れている私を発見したとのこと。

「発光現象は、状況と時間的にリサちゃんがこの世界に来たことで発生したみたいだね」

謎が解決され、納得したとばかりに頷いた彼に、ずっと聞きたかったことを聞いてみることにした。

「それで私は帰れるんですか？」

不安と少しの希望を持っていた。でも、私の運はこの2人に会い、生還したことで使い果たしてしまったらしい。

「……ごめん、無理だと思う」

ギルフォードさんはすごく良い人だと思う。見ず知らずの私を拾って世話をしてくれただけでも恩を感じるのに。その彼にこんなに申し訳なさそうな顔で言われたら、受け入れるしかない。

それに、そもそも地球はどこにあるかなんて、私には説明できない。その上、この国の仕組みと社会体系は知らないが、王宮魔術師というのは恐らく国の要職だと思う。

その彼の言うことなら本当なんだろう。なんとなくだけど、嘘をついているようにも見えないし。

自分が出来ないことを、人に求めるのは違う気がする。でも少し期待してただけに、若干落ち込んだ。

そんな私を元気づけようとギルフォードさんは頻りに帰り方を探すと言っているが、起きてしまったものはしょうがないし、泣いても怒っても変わらないのなら、笑って過ごした方がいい。

「ギルフォードさん、ありがとうございます。でも、大丈夫です」

私は笑ってそう言った。ギルフォードさんの表情から察すると、うまく笑えていなかったみたいだったが。

うん、大丈夫。そのうち気持ちの整理もつく。

「……あのね、リサちゃん」

しゅん、と黙ってしまったギルフォードさんの代わりに、アナスタシアさんに話しかけられる。

「はい」

「リサちゃん良かったらでいいのだけど、私たちの娘にならない？」

「……はい？」

それからアナスタシアさんは話し始めた。二人には子供がいない、いや、出来なかったこと。でも、今まで養子を貰うのも気が進まず、二人で生活してきたこと。

そして、リサと出会って二人はそれぞれ思ったらしい、子供が出来なかったのも、養子を貰う気が起きなかったのもリサに会う為だったと。ちよっと思ひ込みが激しいのでは？ と内心想ったが、二人の顔を見ると至極真面目にそう思っているようだ。

向かいのソファアに座っていたアナスタシアが私の隣に移動してきて、私の手をぎゅっと握った。

「家族になりました」

二人の真摯さに、私は頷いた。

その後、二人は私のことを14〜15歳くらいだと思っていたことが発覚。嬉しいやら悲しいやらで少し複雑だが、実年齢を理由に二人を「パパ」、「ママ」と呼ぶのを免れた。目に見えて落ち込んでしまった二人には申し訳ないが、「ギルさん」、「シアさん」と呼ぶことで納得してもらった。

そうして、私の異世界生活が始まったのだが、この時はまだ知らなかった。

この世界の食文化水準がもの凄ーーーーく低いことを。

病人食だと思って食べていた味が極薄のミルク粥っぽいものが、高級食だったということ。

異世界の文化を知りました。

私が異世界のクロード家に来てから1週間が経った。

午前中はシアさんにこの世界の常識など教えて貰い、午後は侍女長のマリーさんか、執事のレイドさんに生活文化などを教え貰う。そして、夜にはお仕事から帰ってきたギルさんに魔術について教えて貰う、というサイクルで毎日を過ごしていた。

まず分かったことは、ここはフェリフォミア王国という国の王都らしい。この世界には大小10カ国あり、フェリフォミア王国はその中でも一番豊かな国だそう。国土には海と広大な山脈が連なっており、資源に恵まれているのが、その要因らしい。フェリフォミア王国の気候は、日本に近く過ごしやすいそう。冬はロシア並みの極寒になるとかじゃなくて良かった。

そして、どういう仕組みかはわからないが、北と南で気温差はあるが、時差と四季の差は無いという不思議な構造をしていた。どうしてそういう構造なのかは知らなくても困らなそうなので、追求しないでおくことにした。うん。

元の世界と一番の違いが、魔術があることだ。魔術には大きく分けて精霊魔術と魔道魔術の2種類あるらしい。

精霊魔術はその名の通り精霊に力を借りて発動する魔術だ。その為、まずは精霊を見ることが出来、意思の疎通が出来なければなら

ないらしい。

私は精霊が見えるらしく、試しに話しかけてみたら普通に会話も出来た。そのことをギルさんに言うと、王宮魔術師にならないかと熱烈なスカウトを受けた。将来仕事にするのもいいかもしれないと思ったが、今のところ保留にしておく。

どうやら精霊魔術は適性があるのは人はそう多くないらしい。そして、精霊魔術を使え、国立の魔術学校を卒業した人を一般的に魔術師と呼ぶそうだ。

一方、魔道魔術は魔術具を媒介にし発動するもので、魔術具さえあれば誰でも使えるらしい。基本的に生活必需品が多い。冷蔵庫、冷凍庫、コンロなど、元の世界であった家電は一通りある。ただしテレビはなかった。でも、電話もあったし、時間の表示は違えども時計もあった。家電はないけど、生活には不便しなさそうだ。

そして、言語だが、外来語や和製英語が通じないくらいで基本的に日本語が通じるが、文字は全く違っていた。構成は母音と子音を組み合わせる表記する為、ローマ字のような感じだが、これは文字の読み書きが出来るようになるまで時間がかかりそうだ。当面は手製の五十音表を使って慣れなければ。

文化的には最初の印象通り中世のヨーロッパっぽい。服もドレスだし、装飾とか建築様式も似ていると思う。個人的にヨーロッパの家や風景が好きだったので、楽しい。服もゴテゴテしているものでなければ、大丈夫だ。ちょっと豪華なワンピースと思うようにしている。

余談だが、服などはすべてシアさんが用意してくれている。シアさんはこの国の大商家の生まれで、自分でも服飾会社を営んでいる。

るらしい。本人は好きなことを好きなようにしていると云っているが、この世界のファッションリーダー的存在のようだ。

概ね不便も不安もなく快適に送っている異世界での生活だが、ただ一つだけ不満がある。

それは、食事だ。

クロード夫婦に拾われてから数日、病人食だと思つて食べていた味のほとんどないミルク粥みたいなものは、病人食ではなく、ごく一般的な食べ物で、更にそれは結構高級食だということが発覚。とつさにパンでいいと言つたら、その次に出てきたものは、石かというくらいカッチコチの焼いた小麦粉の塊だった。

その上、こちらの食事は基本的に塩味しかない。たまに胡椒味と砂糖味があつたが、基本的にその３種類だ。素材の味を生かすといつても、その３種類じゃ野菜の青臭さとか、魚の生臭さとかが逆に引き立ってしまうこともあるということを初めて知つた。

日本の現代の食事に肥えた舌には、頑張つても１週間が我慢の限界だった。

居候の身とはいえ、今日こそは言わせて貰う。

「なんで？ 文化って普通は衣食住から発展するんじゃないの？
なんでこのご飯はこんなにまずいのー！！」

ああ、醤油と味噌が恋しい。

食卓事情を知りました。

「なんで？ 文化って普通は衣食住から発展するんじゃないの？
なんでここのご飯はこんなにまずいのー！！」

我慢の限界に達した私の嘆きは、クロード家の朝食時の食卓に響き渡った。装飾は豪華なダイニングテーブルの上の料理は、台とは違い貧相だ。

そして、私のあげた声に両隣に座るギルさんとシアさんはポカンとした表情をし、給仕のために控えていた侍女長のマリーさんも執事のレイドさんも一様に驚いた顔をしていた。

ハッ和我に返ると、こちらに来てちょっぴり被っていた猫が脱げ、素がモロに出てしまってるのに気付く。ヤバイ。これまでいい感じで築いてきた人間関係が……。でも、この不味いご飯をこれからもずっと食べていかなきゃならないなんてきつ過ぎる！！

「あの、リサちゃん？ もしかしてリサちゃんのいた世界のご飯とは違うの？」

いきなり感情的になった私に氣を使つてか、シアさんが控えめに聞いてくる。

「……えー、はい。残念ながら……」

取り繕うのも今更な気がするし、どうせならと正直に話すことにした。

朝食をひとまず終え、ギルさん、シアさん、侍女長のマリーさん、執事のレイドさんに話を聞いてもらうことにする。

「私が住んでいた日本という国は、世界から見ても食文化が進んでいた国でした」

寿司、天ぷらに焼き焼き、うどん。カレーもラーメンも日本で進化を遂げ、今では立派な日本の味。お漬物に納豆に梅干しは、今、目の前にあったなら、ご飯何杯でも食べられる。……ああ、白米そのものがないんだった。次々に浮かぶご飯の妄想に、口内に唾液が大量に分泌されるのを感じる。

主食は米で、パンと麺も食べるし、調味料も山ほどあることを話すとただで4人は驚いていた。でも、4人が驚いていたのは“調味料が山ほどある”って部分で、逆に米と麺って何？ と質問されてしまった。……共通言語で話が出来ない虚しさを味わった。

軽く米と麺の説明をして、私はこの食文化を把握するため、質問をした。……見たことのない私の勢いに4人は若干引いていたが、この際、気にしないことにする。

聞くところによるとフェリフォミアが一番食文化的には進んでいるらしい。要はこの世界の最高ランクだ。これ以下はあっても、これ以上はない。その事実には落胆したが、いっそもうどうでもいいと思

った。

調味料は予想通り、塩、胡椒、砂糖、以上だ。虚しい。

そして、驚くことにお菓子というのは、概念そのものがなかった。もう、言葉もない。

「……リサちゃん、大丈夫？」

質問の答えが返ってくる度に落ち込んでいく私を、ギルさんは氣遣ってくれているみたいだ。

うん。これは自分でどうにかするしかない、それしかない。

「ギルさん、シアさん」

「「は、はい」」

「今日からクロード家のご飯は私が作ります！」

厨房を拝見します。

今更だが、クロード家はすごく広い。家の中を全部見たことはないが、私が使わせてもらっている部屋だけでも30畳くらいある。そのくらいの部屋がクロード家には他にも十数部屋あるらしい。私が今まで住んでいた1Kのアパートが、シアさんが集めた私専用の服が詰まっているクローゼットと同じくらいなのは考えないようにしよう。

そんなクロード家のまだ見たことがない厨房へ、侍女長のマリーさんに案内されやってきた。

備え付けの魔術具コンロ6口と業務用っぽい魔術具冷蔵庫、同じく業務用っぽい魔術具冷凍庫、水道も魔術具だ。広さも設備も申し分ないと思う。

「マリーさん、いつも料理は誰が作ってるんですか？」

そういえば今まで、聞いていなかったのに気付いてマリーさんに質問する。

「お料理は侍女が交代で作っています。作るといってもスープと主菜で、パンは王宮御用達のパン屋から届けてもらっていますよ」

なんと、あの力チコチパンは王宮御用達だった！ この国の王様もあの硬いパンを食べるのか……。国の最高権力でさえ何も文句を言わないでいるのが不思議すぎる。この世界の人間はどれだけ強靱

な顎を持っているんだろうか。あのカチコチパンを食べ続けたら、いつか顎が進化してしゃくれてしまいそうだ。

……もういい。この世界の食文化にはもう驚かないことにしよう。うん、何もなかった。私がこの世界の食の開拓者になるんだ。すべては私のよりおいしいご飯のため。

自分自身に言い聞かせるように決意を固めた後、マリーさんをお願いして食材を揃えて貰うことにする。マリーさんは何故かやる気満々。協力的で大いに助かります。

元の世界ならマリーさんを見て、料理が出来ないというイメージは湧かないだろう。ちよつとぼつちやりしている上に、優しくて、白い割烹着着せたら学食にいそうだもん、マリーさん。それで、こつそりから揚げとかおまけしちゃう感じ。ああ、から揚げも食べた。うん、今度作ろう。

兎にも角にも、今考えるべきは、約2時間後にある昼食と今日の夕食に何が作れるかだ。本当はパンの改良から始めたいが、恐らく酵母から作らざるを得ないので時間がかかる。病人食だと思っていたミルク粥も中に入っていたのは小麦だったのを鑑みると、お米はないか食べる風習がないということだ。ということは、今日作れる主食は消去法で麺類ということになる。

麺かー。うどん、そば、ラーメン、パスタ。

うどんとそばは醤油がない為、却下。ラーメンはかん水（ラーメンを作るときに必要なもの。かん水を入れないとラーメンにならない）がない為、こちらも却下。

ということは残るはパスタだ。小麦はパンにも使っているし、卵らしきものもスープに入っていたところを見るとある。あとは、塩と水。決まりだ、パスタしかない！ というか今はパスタしか作れ

ない！！

そうこうしているうちに、マリーさんを筆頭に侍女さんやレイドさん、庭師のおじさんなど、クロード家の使用人総出で食材を厨房内に運んでくれた。居候の私の為に、本当に有難い。美味しいご飯を作ります！

まず、調理台に小麦粉の山を作り、天辺を凹ませそこに卵を割り入れて混ぜる。そこにぬるま湯にお塩を溶かしたものを混ぜていく。5分くらい捏ねる。

一緒の工程をマリーさんにもしてもらい、同じものを作る。出来ればクロード家の人たちみんなに食べてもらいたいからね。多めに作るに越したことはない。

生地を20分くらい寝かせる。こちらにビニール袋はないようなので、乾燥防止にボウルに入れ濡れ布巾をかぶせておく。

その20分の間に食材の吟味をする。マリーさん等侍女の皆さんに食材の名前を教えて貰いながら、ちよつとずつ齧って味を確かめていく。今日のパスタに使えるそうなのは、マローという赤いナスのような野菜で、味がトマトなもの。それと、ザラナという葉っぱがイチヨウの形をしたほうれん草に似ている葉もの野菜。そして、トトという鶏に似ている鳥肉。トトは食用として一般的に食べられているらしく、パスタに使った卵もこの卵らしい。

今日は使わないが、ずっと異彩を放っていたヤシの実のようなバスケットボール大の実は、ミルクと呼ばれ中身は牛乳そのものだった。熟すと脂肪分が上がるらしく、これでバターも生クリームもチ

ーズもできることに一人喜ぶ。侍女さん達には全く理解してもらえないのが歯がゆい。他にも使えそうな食材がいろいろあったが、とりあえず今は置いておく。

そろそろ時間なので、寝かせていた生地を平たく広げ、3cm位の正方形にカットしていく。カットした生地の真ん中できゅっと指で摘まむ。すると蝶々のような形になる。これはファルファツレと呼ばれるパスタで、家でも結構簡単に作れるので、よく作っていた。初めて見るパスタに戸惑っていた侍女さん達も蝶々は可愛いと思ってくれたらしく、きゃっきやと楽しんで作ってくれた。女の子が可愛いものが好きなのは異世界共通なのだ。

できたパスタは沸騰したお湯で茹でる。こちらはほぼ完成間近だ。

茹でている間にソースを作る。鳥肉と、ザラナ（ほうれん草もどき）を適度な大きさに切って、マロー（トマトもどき）の皮を湯剥きしてこちらは2cm位に切っておく。鍋に油をしき、小麦粉をまぶした鳥肉を炒め、こんがり火が通ったところで、ザラナを軽く炒める。その中にマローを入れ、マローの形が少し崩れるくらいまで煮込む。塩コショウで味付けをしたら、ソースの出来上がり！ の中に茹でたパスタを入れ、絡めたら完成！！

ああ、この世界に来て始めた食べたちゃんとしたご飯！ ただのトマトソース（もどき）パスタにこんな感動するなんて……。

その後、昼食に出されたパスタにクロード家の皆は一様に感動し、私はクロード家の料理担当となったのだった。

異世界の食文化発展について考察しました。

そもそも日本には約60〜70年くらい前まで冷蔵庫はなかった。その為、食材の保存といえば、乾燥させるか、塩漬けにするのが精々だった。その中で、発酵食品である味噌、醤油、納豆などの日本の食文化には欠かせない食材が出来ていった。

一方、こちらの世界では、魔術具があった。元の世界で困っていた食材の保存方法も、こちらでは魔術具の発展により冷蔵・冷凍保存が可能になるのが早かった為、保存方法に困らなかったのである。故に、元の世界では保存の試行錯誤によって生れていた食材は、こちらでは全く生まれることがなかったのだ。

以上はあくまで予想ではあるが、ギルさんに聞いた魔術具発展の歴史を考えると概ねあっていると思う。失敗は成功の母というが、不便から生まれるものも多いということだ。うん。

パスタを披露した昨日からクロード家の主食はパスタになった。侍女さん達も作り方を覚え、積極的に手伝ってくれているし。とはいえ、主食がパスタだけなのは心もとない。そこでふわふわもちもちのパンを食べるべく、今日からパン酵母を作るとする。

マリーさんはすっかり私の料理のファンになってくれて、今日も隣でアシスタントしてくれるらしい。昨日持ってきてくれた食材の中から、リンゴに似た果物を見つけた。リルの実というらしく、味

はオレンジだった。この果物から酵母を作る。

まず煮沸したガラス瓶を用意する。そこに皮つき、種つきのまま太く千切りにしたリルの実をなるべく隙間なく入れる。そこに蜂蜜を大さじ1杯と、一度煮沸し冷ました水を入れ、コルクっぽい木の蓋をしっかりと締め密封させる。

そして、今日は天気もいいことだし、日当たりのいい温かい部屋に置いておくのが良いだろう。サンルームのような部屋があったので、そこに置いておくことにした。ああ、早く出来てほしいなあ。ふわもちなパンを食べるのが待ち遠しい。

余談であるが、温かい部屋に酵母の瓶を置いておく、とマリーさんに言うところ「腐っちゃいます！」と言われた。たぶんこの世界の人からすると、発酵＝腐るなんだろうな。もったいない……。

気温の下がる夜は、私が酵母と抱え、同じ布団で寝た。マリーさんにはすごく変な目で見られたが、めげずに繰り返すこと数日。

出来た酵母で焼いたパンはふわもちでおいしかった。

クロード家の皆には感涙された。

私もちょっぴり泣いてしまった。

番外・可愛い娘ができました。

前編（前書き）

番外編、ギルフォード視点です。

番外・可愛い娘ができました。 前編

リサちゃんと出会ったのは、本当に偶然だったんだ。

リサがこの世界に来たその数時間後。

「お師匠様！ 先程、ククリの森で魔術現象が起こったらしいと報告がありました」

小走りで僕の執務室にやって来るなりそう言ったのは、ロロ・ミレンくん。僕の助手をしている。魔術師学校を卒業したばかりの16歳の少年だ。性格は真面目で努力家で素直。ただ、思っていることがすぐ顔に出るから、なんというか背の低さも相まって子犬みたいな子だ。ま、学校を首席で卒業したくらいだから魔術の腕は確かなんだけどね。

そんな彼は隣で忙しく詳細を話し続けている。やけに熱が籠っているところを見ると調査に行く気満々らしい。

うーん、ククリの森か。あそこは精霊も多く住んでいる所だし、魔術現象が起こっても不思議ではないんだよね。あ、ククリの森は温泉地のエルスガルドに近いな。……よし、これはシアとデートに行くしかない！ 一昨日喧嘩をして以来、彼女は不機嫌だし、ここはちよつと遠出して彼女の機嫌を取り戻さなければ！

ああ、温泉か。確か部屋に専用のお風呂がついている宿があるらしい。そこで、シアと混浴……。うん、良い。すごく、良い。む

ふふ。

じとーっとした視線を感じ、その視線を辿るとロロくんが半眼でこちらを見ていた。あ、そうだ彼のことをすっかり忘れていた。

「お師匠様、僕の話聞いてました!？」

「う、うむ。……これは、ククリの森に調査をしに行かなければならないね」

気を取り直し、真面目な顔で言う。すると、ロロくんの表情がぱあっと明るくなった。彼に尻尾がついていたら、期待するようにブンブン振っていたことだろう。

「やっぱり！　じゃあ、僕が」

「いや、今回は僕だけで言うてくるよ」

僕の言葉にロロくんがショックを受けた顔になった。うつつ、苛めているようで罪悪感があるが、ここは僕とシアの幸せの為に、今回はお留守番してもらおうとしよう。

その後も、付いていくと食い下がって来たロロくんだったが、僕の仕事を擦り付けて引き剥がすことに成功した。夫婦水入らずに、瘤付きは嫌だからね。ごめんね、ロロくん。

その日の午後、僕は愛する妻とエルスガルドに出発した。……ついでにククリの森へも。

エルスガルドで話題の宿にシアは大いに喜んでくれた。うん、良かった。早速温泉に入るとうきうきしている彼女に、僕もご相伴あずかりたいが、先にククリの森に向かうことにする。温泉は夜にね、むふふ。

一人でククリの森にやってきた僕は、森に住む精霊に聞きながら、現場に到着した。今朝、この森では確かに魔術現象が起こったらしい。でも、それは精霊が起こしたものではないと、精霊たちは口々に言っている。そして、「女神様の思し召しなの」とだけ告げて去っていく。

「女神様の思し召し」とは何なのだろうか。

今まで聞いたことのない言葉に首を傾げるが、現場に痕跡がない以上、此处ですることはもう何も無い。

……よし、待っててシア。今から行くよ。

その夜、僕はらぶらぶの夫婦生活を満喫した。

翌日。お昼過ぎまで宿でのんびり過ごし、王都の自宅へ戻ることにした。シアも満足だったのか、僕の隣にご機嫌で座り、馬車に揺られていた。お肌がつやつやなのは、温泉の効果か、僕の頑張りによるものか。可愛さ倍増なのでこの際どっちでも良し。

などと下らないことを考えていると、急に馬車が止まった。まだ、エルスガルドを出て間もないので、王都に到着したとは考えられない。何か問題でも起きたのだろうか？

「レイド、何かあったか？」

窓から御者をしているレイドに向かって声をかける。彼は御者席から降り、僕の傍までやって来る。

「旦那様、前方に倒れている少女の様な人影があるのですが、如何致しましょう」

僕も馬車から降り、前方を見ると道を塞ぐように倒れる人影があった。これでは馬車も通るに通れない。それに、助けるか否かをレイドでは判断しかねるということだ。僕もシアも家柄が並み以上故に、命を狙われる可能性がある。それに、追剥などの賊の罠という可能性もある。まあ、それは僕の腕がある以上、心配には及ばないが。

レイドヘシアに付いているように言い、僕はその人物に近づいた。近づくにつれ、異質なことに気付く。よく見ると彼女の髪が黒いことがわかる。僕は、黒という髪色の人種は見たことがなかった。濃紺だったり、こげ茶だったりというのは稀にあるが、ここまで純粋な黒は珍しい。そして、少女の周りには異様ともいえる数の精霊がいた。倒れる少女を気遣うように、守るように取り囲む精霊たち。

精霊が一人の人間にここまで頓着することがあるのだろうか。

少女の傍まで近付き、彼女の顔が見える位置にしゃがみ込む。彼女の目はしっかりと閉じられ、少し苦しそうに眉をしかめている。そっと体を揺すってみるが、目を覚まさないところを見ると完全に気を失っているのだろう。精霊が口々に大丈夫かとこちらを伺ってくる。いる精霊の数が数だけに、ちよつと怖い。

精霊に彼女がなぜ倒れているかと聞いてみる。するとまた精霊は言った。「女神様の思し召し」と。

精霊はそれ以上口を噤んだ。そして、それだけ言うと、精霊たちはこちらを伺いつつも森へ戻っていった。

「女神様の思し召し」とは。ふと、魔術現象があつた森の地面には何か横たわっていた形跡があつたことを思い出す。そう目下の少女と同じくらいの大きさだった。これは偶然か必然か。もしかしたら、僕がここに来たのは「女神様の思し召し」とやらなのかもしれない。決して嘘を付くことのない精霊たちの言葉なら信じるに値する。

倒れる少女を抱き起し、背後で心配そうに伺っているレイドとシアが待つ馬車へ向かった。

馬車に連れて行くや否や、シアが僕の腕から少女を奪い去り彼女を介抱し始めたのには、ちよつとビビったがあまり言わないでおこう。シア自身にも何か感じるものがあつたらしい。

僕らは未だ目を覚まさない少女を連れて、帰路についた。

番外・可愛い娘ができました。 後編（前書き）

前話の続きで、アナスタシア視点です。

番外・可愛い娘ができました。 後編

3日前、ギルと久々に夫婦喧嘩をした。

理由は、ギルが約束していたデートに行けなくなったから。2週間前から約束していたから、ギルが仕事をサボらずしつかり終わらせていれば、予定通りデートに行けたはずだった。

お弟子さんのロロくんはすぐく申し訳なさそうにしていたけど、今回ばかりはギルが悪い。彼にはサボり癖があつて、魔術探究は好きだが、王宮仕事は嫌い、と思つていいる事が原因なのは知っている。それでも、守れたはずの約束を破つたことに、私は昨日までの2日間、不機嫌だった。

その私の機嫌をどうにか直そうとしたのか、昨日彼は、午前中に王宮から突然戻ってきて、エルスガルドへ一緒に行こう、と誘ってきた。いきなりのことに驚いたが、仕事の調査があるらしい。調査は簡単なものだから、どうせなら温泉に行こうと、彼は言った。

温泉、の一言に心を動かされ、彼の策に乗ってあげることにした。

温泉を満喫し、私はご機嫌だった。泊まった宿は最近噂になつていいる処で、各部屋に専用の温泉が付いている。建物も綺麗で、従業員の対応も凄く良かった。そして何よりギルと久々にいちゃいちゃ出来たのが嬉しい。ギルって草食系に見えて、意外と凄いのよ。うふふ。

ギルの仕事の調査で来ている建前上、1泊しか出来なつたけど、またゆつくり二人で来たいな。

帰りの馬車に揺られながら、早くも次のデートの計画に想いを巡らせていたのだが、急に馬車が止まった。ギルが御者をしているレイドに声をかけると、何か問題でも起こったのか、彼も馬車から降りてしまった。彼は、馬車の横にレイドを残して、どこかに向かったようだ。

「何かあったの？」

窓から顔を覗かせ、傍らのレイドに問う。

「前方に倒れている人陰がありまして……道を塞いでいるので馬車が通れないのです」

なるほど。それでギルが様子を見に行ったのね。彼ならば、危険はない。王宮魔術師の名は飾りではなく、彼の魔術の腕は本物だから。それに、今回の彼の仕事に関係があるのかもしれないしね。なんとなくだけどそう思うのは、女の勘かしら。

しばらくして戻ってきたギルは女の子を抱えていた。

その時、私はその女の子を見て、思った。

—— ああ、私の娘。

私たち夫婦は、ともに健康なのに、何故か子供が出来なった。も

ちろん夫婦の営みもしつかり励んでいる。むしろ標準より多いくらいだ。それでも出来なかった。

何度も行った魔術による検査で夫婦とも“不能”ではないことは証明されている。身内はしょうがないと思ってきていたが、私自身、子供が欲しかった。もともと子供好きではあるけれど、愛する人との愛の結晶が欲しくないと思わない女性はいない。もちろん私だつて。

私が産んだ子供ではないことは私自身が解っているが、でもこの子を見た時に紛れもなく私の娘であると思った。何故そう思ったのかは説明できない。頭がおかしくなったと思われるかもしれないが、そうとは思えなかった。

ギルから奪い取るように少女を馬車の座席に寝かせ、彼女の体を確認する。服は所々汚れていたが、怪我はないようだ。

枕替わりにした私の膝の上、彼女の頭を髪の流れに沿って撫でる。少女の髪は綺麗な漆黒だった。シルクのような手触りのそれにうつとりしながら、その神秘的な色に心が弾む。もう私の中では我が子。我が子がどんな形なりをしていようと愛おしい。

早くこの子とお話がしたい。

早くこの子に可愛いお洋服を着させたい。

早くこの子にママと呼んでもらいたい。

長年夢見ていたことが漸く叶うんだと思うと居ても立ってもいられなかった。

「……ギル、この子は私たちの娘だと思うの」

向かいに座る夫は私の言葉にぎよっとする。

「……シア、僕たちの娘って……どういうこと？」

「私たちに子供が出来なったのはこの子に会う為だと思う。もちろん私が産んだ子ではないけれど、そう思うと納得というか、自然とそんな気がして……不思議なんだけどね」

私の言ったことに、ギルは何かを考え込んだ。

もしかしてギルはそう思わなかったのかしら……？私がおかしい？もしもそうなら彼はこんな私を嫌いにならないだろうか……？

不安に思いながら彼を見ると、真面目な表情で私を見つめてきた。

「実は、精霊たちが僕に言ったんだ。この子のことを『女神様の思し召し』だと。君がそう感じたのなら、この子は本当に僕たちの娘なのかもしれないね」

彼はそう言って優しく笑うと、私の手を握った。私は、目が熱くなって、言葉が出ないかわりに、その手をしっかりと握り返した。

ああ、この人と結婚して本当に良かった。

幸せを噛みしめ、まだ目を覚まさない娘に想いを馳せながら、私
たちは帰路についた。

彼女はこうしてやってきました。

さて、異世界トリップしてクロード夫妻に拾われた理沙だが、彼女は何故トリップしてきたのだろうか。

それには知られざる理由があった。

始まりは、とある世界の神様たちのお話。

主神は数人の神々に世界を作することを命じた。

命じられた神々はそれぞれの世界を作った。

その中でも、ある世界の男神様は、人間を創りこそすれ、人間には何の力も与えなかった。

一方ある世界の女神様は、人間を慈しみ、人間に魔術を操る力を与えた。

更に、その中でも選ばれた人間には精霊の恩恵も与えた。

その為に起こる弊害を知らずに――。

「それでな、俺の世界の人間はどんどん進化しやがる。道具もいるんなものを作るし、特に食べ物は自分たちで改良しては新しいものが出来てく。この間、こっそり行った時もな――」

この方は、アージス様。わたくし私の同僚の男神様です。今、神界では自分の創造世界にお忍びで遊びに行くのが密かなブームなのです。アージス様はご自分の創った世界に行つては、その体験を私に話してくれるのですが……。

「でな、次回は食べ歩きツアーにしようと思つてな。いやゝ1回じゃ食べきれないからまずは東側から攻めるべきか」

どうやら人間の作った食べ物をお気に召したらしく、毎回私に自慢なさるです。確かに、お話を聞く限りでは、とても美味しそうなのです。国ごとに色々な特色があつてそれぞれの味わいがあると先日もおっしゃっていました。

「お前のところはどうなんだ？」

「私の世界の人間たちは……」

私が与えた魔術の技術は日々進歩しています。ですが、アージス

様の世界には科学というそれに匹敵するものがあつて、その上、食文化も大変発達しているように思います。

実は先日、私も私の創造世界に行つて参りました。とても自然豊かで、人々も明るく健やかに生活しておりました。ただ、お料理については非常に残念でした。アージス様の世界のお話を聞いていた分、がっかりしてしまつたのです。

「……それなりのお味でしたわ」

「はつ、そんなこと言つて、不味かつたんだろ？ あーあ、お前が魔術なんて便利なもん与えっからそうなつたんじゃねえか？」

アージス様はそう言つて意地悪く笑いました。

私が悪かつたのでしょうか？ アージス様が何もお与えにならなかったのは、ただ面倒だったからでしたのに！ それなのに、私も私の世界の人間も馬鹿にされたようで悔しいです！

「……アージス様なんて嫌いです！」

私だつて、私だつて美味しいお料理を食べたいのです！

私は溢れ出そうな涙をぐつと我慢し、そう告げるとアージス様を自分の館から追い出しました。

それから私はいろいろと試みました。アージス様の世界で料理に使う道具を魔術具として世界に落としたり、美味しい食材になる植物を生み出し、種を蒔いたり。もうあの手この手で。

しかし、残念ながら思うような結果にはなりません。私の世界の人間は、魔術の研鑽には熱心なのですが、どうも食事に関しては疎いようです。もちろん、興味を持つ人々もありましたので、何かきっかけさえあれば良いと思うのですが……。

そんな時、アージス様が私の館にやってきました。先日は私もついあんなことを言ってしまったので、どことなく気まずく思います。

「……この前は、悪かったな」

「いえ、私もあんなことを言ってしまったから……」

アージス様の顔を見るのが気まずくて、ついつい俯いてしまいました。どんなお話をすれば良いでしょうか……。

「……あのよ、人間に料理、教えたいんだろ？」

「え？」

なんで、アージス様がそれを知っているのでしょうか？ 確かに

ここ最近、私がいろいろと人間たちに施してはありましたが、アージス様にはそのことを一切お伝えしていません。そもそも、私が追い出して以来、お会いもしておりませんでしたのに。

「少しだけ、きつかけをやるくらいだったら手伝えなくもない」

万策尽きていた私は、その言葉に縋る思いでアージス様を見上げました。彼を見つめると、彼はふいと目を逸らしてしまいました。彼のお耳が何故か赤いようなのは気のせいでしょうか？

それから彼は私に提案しました。

——自分の世界の人間を一人だけだったら私の世界に連れてつても良い、と。

ただ、それには条件があつて、私の世界の、1組の夫婦に出来るはずの子供全員と引き換えでなくてはならないと。しかも、その子供はその世界で一番才能を持つものでなければならない、とも。

私は考えました。世界の食文化を発展させる為とはいえ、少なくとも3人の人間の運命を変えてしまうこと。また、その生まれてくるはずの子供達も。

考えに考えた結果、私はアージス様の提案に乗ることにしました。

ただ、その夫婦も、連れてくる人間も心根が優しく、お互いに慈しみむことができる者達を選ぶことをアー吉斯様をお願い致しました。また、連れてくる者は料理の仕組みを知り、食べることが好きであることも。

そして、生まれてくるはずであつた子供たちを精霊に変え、その世界で自由に生きていけるようにしました。

アー吉斯様の提案から少し時が経ち、創造世界では数年が経つたある日。以前より選んでいた人間を私の世界へ連れてまいりました。

どうか、健やかに優しく生きなさい。

そして、私にも美味しいお料理を食べさせてくださいませ。

かくして、理沙という少女はクロード夫婦のもとにトリップしたのだった。

すべては女神の美味しい料理が食べたいというわがままから始まったのである。

それを理沙やクロード夫婦が知る由もない。

また、密かに女神に好意を寄せていた男神の想いが報われたのかは定かではない。

余談ではあるが、理沙がトリップしてきた経緯を、女神の子供達である精霊たちは皆知っていた。

しかし、男神が女神の気を引くためにした自慢話から始まったこの試みは、世界を又にかけて関係のない人間を巻き込むことになったのだ。

元来、嘘を付けない精霊たちは話合い、口を閉ざすことに決めた。

そして、問われた時はこう答えよう——『女神様の思し召し』と。

その言葉に呆れと同情と、期待を込めて。

彼女はこうしてやってきました。（後書き）

第三者視点と、女神視点でお送りしました。

結構くだらない理由でトリップ…。

男神は好きな子をいじめてしまうタイプです。

小さい子に懷かれました。

パンの作製に成功した翌日。

朝食を食べた後、私は部屋にこもり、これからのことを考えていた。パスタ、パンと、何とか主食は確保したが、まだまだレパートリーが少なすぎる。

羊皮紙に足りない食材を書き出す。

まず日本人の主食である米、そして調味料類で醤油、味噌、酢、酒、唐辛子。

調味料はさしすせそのうち、現在塩と砂糖しかないことがツライ。

先行きに不安を感じる。

持っていた羽ペンをテーブルの上に投げ出し、椅子の背もたれに行儀悪く寄りかかる。見上げた天井は蜘蛛の巣ひとつ、シミひとつない。高級そうなシャンデリアが下がり、精霊が降って……え!?

べしゃ、という音と共に私の顔の上に何かが着地する。目、鼻、口を完全に塞ぐように降ってきたそれを、右手で掴むと、それはジタバタ暴れた後、ふいーと飛んでテーブルの上に降り立った。

「……な、何？」

幸いにも顔に痛みはなく、でも今まで体験したことのない感触に鼻をさすりながらテーブルの上を見やる。すると、1人だった精霊が4人に増えていて、ぎよっとする。

「お前らが押すからだ！」

「だって君が始めに行くって言ったんだろ？」

「二人とも喧嘩はだめだよ」

「……馬鹿二人」

「「なんだって!？」」

……漫才？

ちびっこ精霊4人の始めた口論をどうしたもんかと見守る。これはつつこんだ方が良いのか？

「あの〜君たち？」

4人はハッと気づいて、一斉にこちらを振り向いた。その中に、クロード家に来てすぐに会った子がいるのに気付いた。

「君、前もあつたことあるよね？」

緑色の髪の精霊。スカートを履いてるから、女の子だろうか。

「はい、そうです！ わたしです！」

彼女ははにかみながら、返事してくれた。

「おい、緑の、お前一人だけずりーぞ！」

それを見ていた赤い髪の子が、そう言っただけで彼女の髪を引っ張った。赤い髪の子は、さっき私の顔面に降ってきた子だ。

「赤いの！羨ましいからってやめろよ！」

そして、青い髪の子が赤い髪の子を窘める。この二人は男の子の様だ。

「……嫉妬、見苦しい」

一人離れたところでぼそと呟いたのは黄色の髪の子。この子もスカートだから女の子みたい。髪を掴まれていた緑の髪の子は半泣きで、黄色の髪の子の後ろに隠れた。

テーブルの上でちょこまかやってる子たちは、なんだか微笑ましい。頬杖について見守っていると、赤い髪の子がこちらを見上げた。

「おい、お前！」

「な、何？」

「…悪かったな、落ちてくるつもりじゃなかったんだ」

照れくさいのか、明後日の方向を見ながら赤い髪の子が謝ってくる。

「いいよ、痛くなかったしね」

気にしないように、優しく言うと、彼はほっとしたように肩の力を抜いた。

「それより、君たちどうしたの？」

ギルさんから、精霊は滅多なことがない限り人前には出てこないと聞いた。それなのに4人もの精霊が一堂に会するなんて、普通じゃないのでは？

「困っている様だったので、力になればと思ったんです」

そう言ったのは青い髪の子だった。他の3人も同意するように頷いている。

話を聞くとシャンデリアの上で私を見ていたらしい。話かけようとタイミングを見計らっている時に、私が急に上を向いたから、驚いて赤い髪の子が落っこちてしまったそうだ。

「わたしたち、精霊だから知ってることも多い」

「精霊の魔術も使えるしな」

なんか、私好かれてる？ いや、嫌われるより良いんだけども。

「君たち名前は？」

なんとかな髪の子、と呼ぶのはさすがに憚られる。

「名前なんてねえよ」

ええ？

「じゃあいつもお互いをなんて呼んでるの？」

「赤いの」

「青いの」

「緑の」

「黄色の」

……私がなんとかな髪の子と呼ぶのと大差なかった…。

「あの、もし良ければ僕らに名前を付けてください！」

青い髪の子が言うと、他の3人も同意するように頷いた。……4
人の目にももの凄い期待が込められているような…。

「私なんかが、名前つけていいの？」

「はいです！」

元気よく緑の子が返事をした。

うーん…、急に名前と言われても…。

4人の特徴を観察する。特徴といっても性格が分かるほど、まだ接してないし、今わかる特徴って髪色ぐらいなんだよな！。

うん、シンプルにそれで行こう。

赤い髪の子は、

「君は蘇芳^{すおう}」

青い髪の子は、

「君は青藍^{せいらん}」

緑の髪の子は、

「君は萌葱^{もえぎ}」

黄色の髪の子は、

「君は山吹^{やまぶき}」

髪色に因んだ日本色名にした。…安易だったかな。

不安に4人を見ていると自分の名前を反芻している。どうやら気に入ってくれたみたいだ。

なんか、今思うと特撮のヒーローみたいな配色だな。一人足りないけど。

4人を観察しながら考えていると、4人は落ち着いたのか揃ってこちらを見上げた。

「何か困ったことがあればお手伝いします」

「出来ることだったらやってやるぜ！」

困ったことが…

「この世界にお米ってあったりする？」

「ありますよ」

——え！？

なんか意外と早く主食ゲットかも！？

お出かけしましょう。
(前書き)

ちよつと長くなりました。

お出かけしましょう。

アシユリー商会。

フェリフォミア王国に本店を構え、他国にも支店を持つ。取扱う商品は食品、魔術具を始め、様々。付随した流通業も評判で、各国の王室とも取引がある。

その大商会に私は今向かっている。ちなみにシアさんの実家でもある。そもそも、今日これから行くのもシアさんのコネを使っただけだね。

緑の髪の子改め、萌葱ちゃんから米の存在を聞いた私は、まずシアさんに相談した。萌葱ちゃん曰く、この世界で米は家畜の飼料としてしか使われていないらしい。とすると、一般的には販売されておらず、酪農・牧畜業としてしか取引されていないと思ったからだ。その予想通り、専門業者のみの取り扱いしかない米を手に入れるべく、今に至るわけだ。

いかにも貴族！って感じの馬車に乗って、アシユリー商会へ向かう。精霊4人も一緒だ。私の左右の肩に2人ずつ捕まり、窓から見える景色を眺めている。わいわい賑やかで遠足気分の様だ。ただ、君たちのいる所は私の耳元でもあるから、結構うるさいのだよ…。喧嘩はやめれー、その2人！

シアさんはシアさんで、出かけるのが楽しみらしく、うきうきしている。娘とお買い物するのが夢だったの！だそうだ。その目的のものが米とは、何とも色気がなくて申し訳ない…。楽しそうだ

から、あまりそのことは言わないでおこう、うん。

そんなこんなで、道中、賑やかだった為、この世界に来て初めての外出にも関わらず、景色を楽しむ暇もなく、目的地へ到着してしまった。

馬車から降りると目の前に4階建の立派な建物がそびえていた。よくはわからないが、この世界では高層建築の部類に入るのではないだろうか。大きな玄関は両扉が開け放たれており、人がひっきりなしに行き来している。

シアさんについていくと、大きい受付のカウンターがあった。

「アナスタシア・クロードですが、アレク兄様はいらっしゃいますか？ 今日はこちらにいますと伺っていたんだけど」

シアさんは、受付にいたお姉さんに問いかけると、彼女はシアさんの顔を見るなり、奥の方へすっ飛んでいった。さすがに創業家の一員の顔は有名ならしい。

受付のお姉さんは、ものの数分で戻って来て、2階の一室に案内してくれた。部屋の中央にはソファークッションが鎮座し、そこにシアさんと揃って腰かける。すかさず受付のお姉さんとは別な女の人がお茶を出してくれた。

お茶といっても、こちらの世界でお茶は一般的にハーブティーのことを指す。紅茶や緑茶は飲まれならしい。というかあるかさえ

も不明だ。それに、ハーブティーも葉を乾燥させたものではなく、花を乾燥させたものだ。そして、お茶請けはない。お菓子という概念がないので、しょうがないのだが。その代りなのか、ハーブティーには必ず砂糖を入れて飲む。これはこれで美味しい。

お茶を飲んで、一息ついたところで、部屋のドアがノックされた。シアさんが返事をする、一人の男性が入ってきた。

「シア、久しぶりだね」

「アレク兄様！」

シアさんが立ち上がり、その男性とハグをする。こちらの世界では挨拶もヨーロッパ風らしい。シアさんと再会を喜び合ったその男性は、シアさんの後ろに立っていた私に気付いた。

「シア、彼女が言っていた君の娘になった子だね」

「リサちゃん、紹介するわ。彼は私の兄で、今このアシュリー商会を取り仕切っているの。兄様、彼女がお話した娘のリサよ」

シアさんの兄という彼が私に近づき、片手を差し出してきたので、握手する。

「アナスタシアの兄で、アレクシス・ジゼル・アシュリーだ。よろしくね、リサちゃん。気軽にアレクおじ様って呼んでね」

「初めまして、リサと申します。よろしくお願いします」

アレクシスさんは一言で言うと、ダンディなおじ様だった。クロード家の執事のレイドさんもダンディなんだが、種類が違うダンディなんだよね。レイドさんはすごく知的な感じなのに対して、アレクシスさんはこう女の人に持てそうっていうか…若いときに浮名を流してました感がすごいする。レイドさんが静だと、アレクシスさんは動な感じ。

そのアレクさんにソファ―に促され元の位置に座ると、アレクさんは向かい側に腰かけた。

「それで今日はどうしたんだい？」

アレクさんは早速というように、切り出した。

「アレク兄様にお願いがあって。お米を融通して欲しいの」

「お米を？　なんでまたお米なんだい？　まあ、用意はできるが…」

アレクさんはちょっと不思議そうにしている。そりゃそうだ。普通女性2人が家畜用の飼料を融通して欲しいとは何事かと思うよね。

「リサちゃんが違う世界から来たことは話したでしょ？　それがね、リサちゃんの世界ではお米が主食らしいの」

シアさんは私が異世界から来たことをアレクさんに伝えていたらしい。アレクさんは米が主食と聞いて驚いている。

「お米ってあのお米だよ？　本当？」

「この世界でお米をまだ見たことはないですが、恐らく同じものかと…」

ちらりと萌葱ちゃんを見ると頻りに頷いてるから同じ物なのは確実だ。その言葉が信じられないのか、アレクさんは部屋に控えていた先程お茶を入れてくれた女性に声をかけ、お米を持ってきてもらうように頼んだ。

しばらくすると女性が麻袋を持って戻ってきた。アレクさんがそれを受け取るとテーブルの上で袋の口を開ける。

「お米はこれなんだが…。これを食べるのかい？」

確かにお米だった。ただし、稲から外した^{もみがら}粳殻が付いたままの。

「私の世界のお米と同じですね。粳殻を外して、精米してから食べるんですよ」

「粳殻？ 精米？」

訳が分からないと首を傾げる二人に、私はお米を一粒袋から取り出し、少し爪を立てて粳殻を剥いた。

「この外側の茶色いところが粳殻と呼ばれています。これを専用の機械で剥くと玄米になります。玄米の周りをさらに削り落とし、真っ白なところだけになったものを炊いて食べるんです」

私の指先に乗る玄米になったお米を二人はじつと見つめている。

どうやら籾殻を剥くという考えがなかったようだ。こちらの小麦粉も全粒粉だったし。籾殻が付いたままの米を食べても美味しくないはずだ。

「なるほど…じゃあ、専用の機械があればこれは食べれるんだね？」

「はい。籾摺り（もみすり）と言んですが、籾は摩擦で剥がれます。構造的には、溝のついた臼のようなものがあればいいのですが…」

現代の日本で籾摺りは全部オートの機械だからな。ここは昔からの製法で地道にやるしかないか。当面食べる分は、自力で籾摺りと精米をしないと。

「なるほど。それにしても、リサちゃんがいた世界はすごいんだね。シアにも聞いたけど、リサちゃんが作った料理は驚くほど美味しいんだって？」

「そうなの！ パンも、パスタっていう料理もとっても美味しいのよ！」

シアさんはそのことも話していたようだ。そう言うと、シアさんは自分が持ってきたかごバッグから何かを取り出した。

「じゃーん！ これがリサちゃん特製のパンよ！ アレク兄様食べてみて！」

なんと、それは私が今朝焼いたパンだった。シアさんはわざわざ持参してきたのだ。

アレクさんは薄紙の上に乗るそれをひとつ手に取ると、表情が驚きに変わる。

「これがパンなのかい！？　すごく柔らかい！」

いえ、今朝から時間が経ってるので、ちょっと硬くなってます…。まあ、あのカチコチパンよりはだいぶ柔らかいですけどね。

アレクさんは恐る恐るパンを一口頬張った。

「…美味しい！　まるでパンじゃないみたいだ！」

いえ、紛れもなくパンですから。

「そうでしょ！　美味しいでしょ！」

シアさんもアレクさんに同調する。シアさんは、自分が食べた時の衝撃を頻りに語りだした。確かに、あのカチコチパンしか知らないとしても無理はないよね…。

「リサちゃん、突然だが、このパンの製法を広めてみる気はないかい？」

アレクさんは食べかけのパンを片手に、真面目な顔で私に切り出した。

——パンの製法を広める。

この世界で私がいた場所はクロード家の中だけだったので、今まで思いつきもしなかった。

そして考える。今、パンやパスタを含め、この世界で一番美味しい料理を作るのは私だ。ということは、このままいくと美味しい料理を食べなければ、自分で作るしかない。…それってなんかやだな。全部自分の味じゃん。

「いいですよ」

私は快諾した。

「本当！ マージンもちゃんと支払うからね！ 早速契約しよう！」

商会を取り仕切ってることもあり、やはりアレクさんは商売人のようだ。控えている女性に何かをお願いすると、女性は羊皮紙とペンを持って戻ってきた。

「あの、ただし条件があるんですがいいですか？」

いそいそと契約書類の準備をしているアレクさんに考えを話す。

まず、マージンは少なくていい代わりに、なるべく低価格にして欲しいこと。それと、今後の食材や料理の開発研究に協力してほしいこと。また、それを同じように広めてほしいこと。

それらを話すと、アレクさんは、二つ返事で引き受けてくれた。

アレクさんが作成した契約書を、念のためシアさんに確認してもらい、こちらの字でサインする。

お米を手に入れるはずが、思いもよらず大商会の代表という協力者を得てしまった。

ま、世の中ギブアンドテイクでしょ。

彼女はこうして育ちました。

クロード家に帰ると、アレクさんから譲ってもらったお米を、早速、もみす 粳摺り & 精米することにした。……自力で。

一升瓶のような形の瓶を用意してもらい、粳殻付きのお米をその中に入れる。そして、瓶の口幅より細くて、瓶の深さより長い木の棒を差し込み、中の米を突く。それはもう、ひたすら突く。すると次第に摩擦で粳殻が剥がれ、玄米の外側のぬか部分が削れていく為、精米できるのだ。

どうして私がこんなことを知っているかというところ、私の生い立ちに深く関係があった。

私は普通の田舎町に育った。山間を海岸線に沿って開拓されたその町は、江戸時代には船着き港として栄えたが、時代と共にすっかり寂れてしまった。若い人は都会に出て、今では過疎の道を着々と進んでいる。

そんな町で、私は4人兄弟の末っ子として誕生した。

私の祖母は、戦争で旦那と長男を亡くし、残った子供たちを女手一つで育て上げた女傑だった。幸いにも、我が家には山も畑も田んぼもあったので、食うには困らなかったが、戦後の時代、子供を抱

え、生活していくのは経済的に苦しかった。

だが、彼女は『使えるものは使う、作れるものは作る』をモットーに家計を切り盛りしていた。

そのモットーは、私が産まれてからも家訓のように続き、我が家の食卓に上る野菜やお米から、漬物、梅干し、味噌、醤油まで、ほとんどが自家製だった。

そして、その彼女の息子である私の父は、長男が他界したことにより家を継ぐことになった。父は、高校を卒業した後、公務員として就職し、一家を支えることとなった。その父は、家の大黒柱として家計を支える使命を持っていた為、たばこやギャンブルなどお金を浪費する趣味習慣には一切手を付けなかった。ただし、その反動のように食に関しては並々ならぬこだわりを持っていた。

兼業農家として働きながら農業をしていた父は、何処から新種の食物の苗や種を持ってきたかは、それを育て研究した。また、それを加工・調理することにもこだわっていた。

突然、養鶏をする、と言いだしては、畑の一角に自分で鳥小屋を建てて鶏を飼いだした事もあった。もちろん、鳥の産んだ卵も、鳥自身も我が家の食卓に上ることになった。目の前で鶏が捌かれるのを見た時は、トラウマになり、肉を食べられなくなったが、それも一時のことだった。慣れつてすごい…。

私は末っ子ということもあり、祖母と父に可愛がられたせいとか、その度にいろんな所に連れられ、その技を伝授させられたのだ。まあ、小さい頃は手伝ったらお駄賃が貰えるという下心があったのだが。

しかも、そんな家庭環境を私は短大になる頃まで普通だと思っていた。だって、周りは兼業農家をしてるのが当たり前のお家ばかりだったし、そうでない家も漁師だったり、林業だったり、どのお

家もほぼ自給自足。家で作れないものは、物々交換が当たり前だった。

毎日のように我が家の玄関先では、——こないだは沢山頂きましてこれ少しですが、これはこれは有難くおほほほ——みたいな会話が繰り広げられていたし。

ちなみに、母の実家も果樹農家だったので、母方の実家も同じような感じだった。

そんな環境で私は生まれ育った。

今している籾摺り方法は父が教えてくれた。家の物置には、古くからの農機具もあったのだが、現代の家庭で籾摺りをするにはこれが一番楽だと実演してくれたのが、今私がしている方法だった。

昔、祖母と父に教わった事や、田畑を連れまわされた思い出を懐かしく思いながら、手元はぶすぶすと木の棒で米を突く。

そういえば、家には帰れないんだなと、今更ながら思い出す。

皆、元気かな？ お婆ちゃんはボケたりしてないだろうか。お父さんは年々、頭が薄くなってきたがまだ毛は生き残っているだろうか。お母さんは今でも天然ボケかましているのかな。結婚したお兄ちゃん、お姉ちゃんは夫婦円満にやってるだろうか。すぐ上のお兄ちゃんは、大学卒業したあと、見事にプー太郎になったけど、就職先は見つかっただろうか。無理だったら家を継いでくれ、うん。

淡々とした作業を繰り返しているからだろうか。元の世界にいる家族の事が次々と頭に浮かんでくる。

まあ、家族の皆さん、ご飯は美味しくないけど、私は異世界で元気にやっています。

しみりしないのだった？ いや、もうホームシックになる歳じゃないし。私は失踪も自殺もするような性格じゃないから、家族もどこかで元気にやっていると私は思うはずだ。

それよりも、ああ、早く白いご飯が食べたいな。

卵かけご飯は最強です。

瓶の中のお米をひたすら突くこと数十分。手間はかかったが、無事精米することが出来た。精米したお米から籾殻と米ぬかを取り除く。そして、白米を水で砥ぎ、陶器製の鍋で炊く。この世界には計量カップがないので、ティーカップを代用する。お米をカップ1杯に対して、水を1杯と気持ちちょっと足す。母直伝、我が家の水加減だ。

鍋に蓋をして、まずは中火で5分。5分くらい経つと蓋の隙間がぶくぶくしてくるので、弱火にしてさらに10分。

余談なのだが、クロード家の6口あるコンロは、2口ずつ、強火、中火、弱火、となっている。1つの魔術具コンロでは、火加減の調整が出来ない為、鍋ごと隣のコンロに移動させなければならぬ。

これは、今度アレクさんに相談してみよう。要改善。

5分の砂時計で時間を計りつつ、炊きあがりを待つ。

弱火で10分経ったところで、強火のコンロに移動し、強火に10秒かける。10秒数えたら、すかさず火を止め、蓋をしたまま蒸らす。

白いご飯はもう目前だ。

食事の時間まで、まだ時間があるので、こっそり味見しちゃう

つと。

「ご飯の付け合せは何が良いだろうか。」

冷蔵庫や冷凍庫を見回してみるが、しつくりくる食材がない。そもそも、醤油と味噌がないので、和風なおかずが作れないのが痛いな。

ため息を吐きながら冷蔵庫の扉を閉めると、隣の棚に乗っている籠が目に入った。

「おお！ これは卵じゃないか！ これは私に卵かけご飯にしろと言っているのか！！」

籠から卵を1個取り、お茶碗替わりの深めの器と、お箸の代わりにスプーンを用意する。残念ながらお醤油はないので、お塩で代用。もちろんしゃもじもないので、木べらで混ぜることにしよう。

準備が整ったところで、そろそろ蒸らしも良い頃合いだ。

ちよつとドキドキしながらそつと蓋を開ける。すると開けた瞬間、お米特有の匂いがふわりと広がった。

「白いご飯だー！！」

鍋を覗くと白い米粒達がピカピカと輝いている。私はそおつと木

べらを差し込み、なべ底からひっくり返すようにご飯を混ぜ合わせた。なべ底の方から、美味しそうなおこげが顔を出す。後でこのおこげを塩おむすびにしても絶対美味しい！

軽く混ぜたら、準備していた器に、ほっかほかのご飯を盛る。

まずは、このまま一口食べてみる。

おおー！！ タイ米とかインディカ米のようなパサパサしたお米ではなく、ちゃんと日本のお米だ！ 程よく弾力があって、でんぷんが口の中で甘くなっていく。

もう一口食べてから、ご飯の真ん中を窪ませて、そこに卵を割り入れる。お塩をひと摘まみふりかけ、黄身を割るようにちよつとだけ混ぜる。

そして、黄金色に変身したご飯を一口。

お、お、美味しい！！ ただの卵かけご飯なんだけど、侮るなかれ卵かけご飯！！ まさに、シンプル・イズ・ベスト！！

そうして私は味見のつもりが、卵かけご飯を完食し、その上おかわりまでしてしまった。

そして、私が感激に身悶えながら食べる姿を、クロード家の人たちが、厨房の入口からこっそり覗いていたことを、後に知るのであ

つ
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8476x/>

異世界でカフェを開店しました。

2011年11月2日13時40分発行